

幼児のスポーツ参加と両親の影響（第2報）

——スポーツ教室参加者と非参加者との比較考察——

丸 山 富 雄

1. はじめに

幼児のスポーツ参加と両親の影響について、第1報（仙台大学紀要14集¹⁰⁾）では、中間報告の形で、東京・大宮・仙台の地域的な比較を試みた。そこでは、幼児のスポーツ参加を、一方で「スポーツへの社会化」の視点から、他方で「両親の教育熱」という視点から調査を行った。すなわち、第一に、従来の「スポーツへの社会化」研究が、専ら青少年や成人を研究対象とし、しかも、その方法論は不確かな過去の記憶に頼る回想形式をとってきた。しかし、スポーツへの社会化が幼い頃から開始されるとすれば、直接、幼児・児童の運動やスポーツとの関わり合いが研究されねばならず、その方法もこれまでのような回想的な方法ではない、現在の客観的な状況から把握されるべきである、という方法論的理由からである。第二は、意識の稀薄な幼児のスポーツ参加は、両親の積極的な関与と励ましによって決定されるが、子どもをとりまく物理的社会的環境の変化（悪化）という今日的状況から、幼児のスポーツ参加は子どもの心身両面への効果を期待した両親の教育熱の強い現れとも捉えることができるからである。スイミングクラブのように、スポーツ技術の取得によって直接的スポーツ参加の役割を学習している場合も多い。しかし、小学校入学を期に、あるいは、高学年になってクラブをやめるというスポーツクラブの退会傾向からもわかるように、今日の幼児のスポーツ参加は、スポーツ役割を学習し、後のスポーツ参加のための重要な影響をもつといわれる理念的なスポーツへの社会化モデルに必ずしも一致していない場合

も多いのである。親の積極的すぎる関与は他の学習塾やお稽古事などに代替可能なものであったり（たとえば、しつけ機能）、親の意向に左右された一過性のものであるかもしれないのである。

これらの理由から、幼児のスポーツ参加のメカニズムを明らかにするため、次のような3つの調査項目を設定し調査を行った。

1) 両親の社会的地位

- ・学歴，職業，年間所得

2) 両親のスポーツ関心

- ・運動部所属経験
- ・現在のスポーツ参加（行動，認知，評価の3次元）

3) 両親の教育熱

- ・教育投資（塾，お稽古事などへの参加状況およびスポーツ教室を含めた参加日数）
- ・教育観，教育担当役割

本稿（第2報）は前回の調査データを別の視点から再分析し、幼児のスポーツ教室参加者・非参加者の相違を上述3項目から明らかにしようとするものである。さらに、両親のスポーツ教室への期待を探るため、同時期に行った、スポーツ教室への入会動機およびその効果意識についての調査結果をも加え考察する。また、そこから必然的に生ずる、スポーツへの社会化研究についての方法論的問題についても、若干の考察を行う。

2. 調査方法

今回の分析は、前回は行った3地域の調査デー

タのうちから、スポーツ教室の参加者・非参加者の人数がほぼ等しい東京（赤羽）のA幼稚園児父兄に行ったデータを用いる。

調査は昭和57年9月に質問紙による配票調査によって実施した。有効回収標本数は271（スポーツ教室参加者129, 47.6%：非参加者142, 52.4%），回収率96.4%であった。

調査項目の内容の詳細は第1報に記したが、両親のスポーツ関心および教育熱の変数に關し略述する。

Spreitzer ら¹⁶⁾¹⁹⁾の指摘をまつまでもなく、両親のスポーツ関心は子どものスポーツ参加に大きな影響を持つ。それは子どものスポーツ参加に対する直接的な励ましや強化として現れたり、子どもの行動や態度の「モデル」として機能する。ここでは両親のスポーツ関心を、(a)過去の運動部所属経験と(b)現在の3つの次元(行動、認知、評価)でのスポーツ参加、を変数として設定した。過去の運動部所属経験はSpreitzer ら¹⁹⁾や糸野ら⁷⁾が指摘するようにスポーツ参加と高い相関を持つが、その経験年数や質的な深さも問題となるだろう。行動的スポーツ参加はスポーツ実施頻度を測定し、「クラブに所属し定期的にする」から「ほとんどしない」までの5段階に分類した。認知および評価の次元はSpreitzer ら¹⁹⁾の質問項目によって測定した。すなわち、認知的スポーツ参加は次の3つの指標の総和をその得点とした。「新聞のスポーツ欄をどの程度読みますか？」(4段階尺度)、「日常会話の中で、スポーツの話題はよくでますか？」(4段階尺度)、「スポーツ雑誌やスポーツ新聞を定期的に購読していますか？」(2段階尺度)、である。また、評価的スポーツ参加は、「スポーツからは少しも満足を得る

ことはない」「スポーツをすることは時間の無駄である」という表明に対する、それぞれ5段階尺度の態度測定を行い、その総和を得点とした。

両親の教育熱に関しては、具体的明示的な「目に見える」教育投資(a. 幼児のスポーツ教室以外の塾やお稽古事への参加, b. スポーツ教室を含めたお稽古事などに通う日数)と、抽象的内面的な「目に見えない」両親の教育観、および、補足的に、家庭内における子どもの教育担当役割を調査した。

今回新たに分析した、子どものスポーツ教室への入会動機および効果意識調査は、東京（赤羽）、埼玉（大宮）の幼児体育教室参加者の父兄に対して行ったものである。この調査も、同時期に質問紙による配票調査によって行い、有効回収標本数は76（男子50, 女子26）であった。

3. 調査結果

1) 両親の社会的地位

両親の学歴および年間所得の項目において、表1, 2のように、スポーツクラブ参加者の両親の方が高い値を示し、特に母親の学歴では有意な差がみられた ($P < 0.05$)。父親の職業ではほとんど差はなく、また、母親の主婦専業率は参加者90.7%、非参加者85.9%であった。

表1 両親の学歴 () 内%

		中学卒	高校卒	短大・大卒	
父	参加者 [128]	5(3.9)	42(32.8)	81(63.3)	} $P < 0.05$
	非参加者 [142]	9(6.3)	61(43.0)	72(50.7)	
母	参加者 [129]	3(2.3)	63(48.8)	63(48.8)	
	非参加者 [142]	9(6.3)	83(58.5)	50(35.2)	

表2 両親の年間所得 () 内%

	~150万	150万 ~250万	250万 ~350万	350万 ~450万	450万 ~	不明
参加者 [129]	2 (1.6)	3 (2.3)	22 (17.1)	34 (26.4)	65 (50.4)	3 (2.3)
非参加者 [142]		9 (6.3)	32 (22.5)	42 (29.6)	58 (40.8)	1 (0.7)

2) 両親のスポーツ関心

a. 運動部所属経験

両親の過去の運動部所属経験は表3に示すとおりである。所属経験そのものは父親母親とも、参加者・非参加者群にほとんど差はみられ

ないが（父親では非参加者の方が若干高い）、母親の場合、非参加者母親の約半数が中学校のみの経験で終わっているように、その経験年数や上級学校での経験という運動経験の質の深さで参加者母親の方がまさっていた。

表3 両親の運動部所属経験 () 内%

		所属経験あり	所属経験なし	所属経験あり	中学のみ所属	高校のみ所属	中・高共所属	その他
父	参加者 [127]	93 (73.2)	34 (26.8)	93 (100.0)	22 (23.7)	7 (7.5)	39 (41.9)	25 (26.9)
	非参加者 [142]	110 (77.5)	32 (22.5)	110 (100.0)	23 (20.9)	19 (17.3)	47 (42.7)	21 (19.1)
母	参加者 [128]	83 (64.8)	45 (35.2)	83 (100.0)	27 (32.5)	13 (15.7)	33 (39.8)	10 (12.0)
	非参加者 [142]	91 (64.1)	51 (35.9)	91 (100.0)	45 (49.5)	7 (7.7)	29 (31.9)	10 (11.0)

b. 行動的スポーツ参与

両親の現在のスポーツ実施は、表4のように、両親ともに参加者群の方が高い。特に母親では統計的に有意な差がみられた ($P < 0.01$)。

父親の場合にも、統計的な差はないが、非参加者の父親の半数以上が「行事の時だけ」「ほとんどしない」に回答しており、全体として参加者群の方が実施頻度は高いといえる。

表4 両親の運動実施頻度 () 内%

		クラブに所属して定期的に行っている	定期的に行っている (週1~2回)	時々する (月1~2回)	運動会等の行事の時だけ	ほとんどしない	χ^2
父	参加者 [128]	17 (13.3)	18 (14.1)	42 (32.8)	19 (14.8)	32 (25.0)	3.5
	非参加者 [142]	19 (13.4)	16 (11.3)	34 (23.9)	22 (15.5)	51 (35.9)	
母	参加者 [129]	32 (24.8)	17 (13.2)	20 (15.5)	16 (12.4)	44 (34.1)	13.5
	非参加者 [142]	21 (14.8)	11 (7.7)	13 (9.2)	22 (15.5)	75 (52.8)	

※※; $P < 0.01$

c. 認知的スポーツ参与

父親母親ともに両群間に差はみられなかった。

d. 評価的スポーツ参与

5段階尺度の2設問によるスポーツに対する態度・評価の平均値は、表5のように、父親母親ともに参加者群の方が有意に高かった。

3) 両親の教育熱

スポーツ教室以外の塾やお稽古事などへの参

表5 評価的スポーツ参与の平均値

		平均	s	t
父	参加者 [124]	9.49	1.055	2.63
	非参加者 [140]	9.06	1.544	
母	参加者 [126]	9.42	0.991	2.44
	非参加者 [138]	9.07	1.330	

※; $P < 0.05$, ※※; $P < 0.01$

加率は、スポーツ教室参加幼児45.7%、非参加幼児35.9%で、スポーツ以外においても両親の教育投資の高さが伺える。また、スポーツ教室や塾・お稽古事など教育機関への幼児の参加日数（表6）からも、両群間の明らかな差がわかる。

両親の教育観に関しては、永吉ら¹³⁾を参考に「放任型」「中庸型」「干渉型」に分類したが、父親・母親間に差はみられるものの、参加者・非参加者間には両親ともほとんど差はなかった（表7）。同様に、家庭における教育担当役割も、そこに母親の中心性が伺えるが、両群間の差はみられなかった（表8）。

4) 幼児体育教室への入会動機と効果意識
a. 入会の推進者

「教室への入会をもっとも強く勧めた者」は、母親68.4%、父親17.1%、その他14.5%で社会化エージェントとしての母親の役割が明らかであった。特に、サンプル数は少ないが、女子の場

合は80%が母親であった。

表6 スポーツ教室・お稽古事などへの参加日数 ()内%

	なし	週1日	週2日	週3日以上
参加者 [129]		26(20.2)	57(44.2)	46(35.7)
非参加者 [142]	91(64.1)	33(23.2)	10(7.0)	8(5.6)

表7 両親の教育観 ()内%

		放任型	中庸型	干渉型	不明
父	参加者 [128]	89(30.5)	71(55.5)	11(8.6)	7(5.5)
	非参加者 [142]	37(26.1)	80(56.3)	20(14.1)	5(3.5)
母	参加者 [129]	17(13.2)	92(71.3)	17(13.2)	3(2.3)
	非参加者 [142]	11(7.7)	109(76.8)	19(13.4)	3(2.1)

表8 家庭における教育担当役割 ()内%

	父親	母親	両親同程度	不明
参加者 [129]	12(9.3)	37(28.7)	80(62.0)	
非参加者 [142]	14(9.9)	38(26.8)	85(59.9)	5(3.5)

表9 幼児体育教室の入会動機

N=76 複数回答 ()内%

1. 何となく	1 (1.3)	
2. 子どもが入りたいと言うから	24 (31.6)	
3. 友達が入っていたり、友達の父兄に誘われたから	5 (6.6)	32 (7.7)
4. 午後のひととき、子どもをあずかってもらえるから	0 (0.0)	
5. 会費が安いから	2 (2.6)	
6. 体が弱かったり、体力がないので	14 (18.4)	
7. 肥満だったり、体に不自由な点があるから	2 (2.6)	
8. 運動がきらいな子だから	7 (9.2)	49 (11.8)
9. 消極的で内気な子だから	15 (19.7)	
10. わがままで協調性がなかったり、礼儀作法がないから	11 (14.5)	
11. 友達を多く作ってほしいから	37 (48.7)	
12. 元気できはきした子になってほしいから	42 (55.3)	
13. より健康で丈夫になってほしいから	55 (72.4)	182 (43.9)
14. 運動好きな子になってほしいから	46 (60.5)	
15. 将来、スポーツマンや選手になってほしいから	2 (2.6)	
16. 根気や頑張りのきく子になってほしいから	57 (75.0)	
17. 礼儀正しい子になってほしいから	27 (35.5)	
18. 協調性のある子になってほしいから	34 (44.7)	149 (35.9)
19. 率先性や指導力のある子になってほしいから	8 (10.5)	
20. 自制心のある子になってほしいから	23 (30.3)	
21. その他	3 (3.9)	3 (0.7)
計		415(100.0)

b. 入会動機

子どものスポーツ教室参加への親の期待を、直接的な入会動機から調査した。表9がその調査結果であるが、調査項目の(1)から(5)までは親の非積極的な動機を、(6)から(10)までは子どもの心身両面での治療的な動機を、(11)から(15)は身体や運動および生活面での積極性に対する動機を、(16)から(20)がパーソナリティ一面での動機である。これら5項目ごとの回答数はそれぞれ全体の7.7%, 11.8%, 43.9%, 35.9%であった。このことから、子どもの心身両面での現在以上の積極性を望む親の強い期待が伺える。回答数の多い「根気や頑張りのきく子になってほしいから」や「より健康で丈夫になってほしいから」「運動好きな子になってほしいから」「元気できはきした子になってほしいから」などは、永吉ら¹³⁾や西野ら¹⁴⁾と同様、種目にとらわれない、一般的に親の期待度の高い項目である。

回答の中で、(15)「将来、スポーツマンや選手になってほしいから」(2.6%)が極端に少ないこと、および、(17), (18), (20)の項目にかなりの父兄が回答していることは注目に値する。(15)の結果は、その回答内容を子どもが将来一流競技者・選手になってほしいという具合に誤解している場合も多いと思われるが、幼児を体育教室に通わせている両親は、必ずしも将来その子が直接的なスポーツ参加者になることに強い期待を持っているわけではないことを示していると思われる。そしてまた、(16), (17), (18) (20)の子どものパーソナリティ面での期待、しつけの面での期待を考え合わせると、体育教室への親の包括的な期待と同時に、相対的にスポーツ役割の学習というスポーツへの社会化に対する期待は薄いといわざるを得ない。それは、この教室が種目を限定しない体育教室であることに起因するかもしれないが、幼児のスポーツ教室の場合には、スポーツによる態度、価値、性向の取得(スポーツによる社会化)に、より親の期待は集中しているといえるであろう。

c. 効果意識

表10は、スポーツ教室参加に対する、親の効果意識の上位6番目までの回答である。全体的に運動や生活面での積極性にその効果を見い出しているが、子どものパーソナリティ面での効果は親の期待ほど現れていないようである。このような性格形成の面は遅効性のもにだけに当然ではあるが、親の第1に期待している「根気や頑張り」に対しては10%弱の両親がその効果を認めるだけであった。

表10 幼児体育教室参加の効果意識
N=76 複数回答 ()内%

1. 運動が好きになった	40(52.6)
2. 友達と元気に遊ぶようになった	24(31.6)
3. 友達が増えてきた	16(21.1)
4. 生活全体を通じ、活発さや意欲がでてきた	15(19.7)
5. 体力がついてきた	14(18.4)
6. 食欲がでてきた	12(15.8)
6. ルールやきまりを守るようになった	12(15.8)

これら2つの調査結果から、はじめに述べた両親の3項目に関する、幼児のスポーツ教室参加者・非参加者群にみられる相違を要約すれば、次のことが指摘できる。

1. 両親の社会的地位は参加者群が若干高い。特に母親の学歴は有意に高かった。このことは、調査対象幼児の居住環境すなわち機会的便益が同じであるという条件の中で、スポーツ教室参加者の場合、子どものスポーツへの社会化並びに両親の教育熱にとって、好都合の経済的背景・意識的背景となっているといえる。

2. 両親のスポーツ関心では、過去の運動部所属経験、行動的スポーツ参与、評価的スポーツ参与の項目で、参加者群が高かった。特に、母親の場合、参加者群は内容的に豊かな運動部所属経験を所有し、行動・評価のスポーツ参与の次元では非参加者群に対し明らかに高い値を示した。両群間で認知的スポーツ参与に差がみられなかったのは、マスコミによるスポーツの二次的環境がほとんど均一化している現在、スポーツ接触の機会にも差が現れなかった結果と

思われる。しかし、その他の項目から、参加者両親のスポーツ関心度の高さは明らかであり、この結果は Spreitzer ら¹⁹⁾の指摘するスポーツへの社会化モデルと一致する。

3. 両親の教育熱という側面では、教育投資からみる限り参加者群の高さが明らかである。両親の教育観や教育担当役割に差がみられなかったのは、回答しづらいという設問自体の問題や、家族形態や労働・通勤形態などの物理的社会的条件、教育役割に対する意識的背景など、養育に対する現在の一般的な母親集中型「母子一体性」がここでもみられた結果であろう。そのなかで、入会動機にみられるように、特に母親のスポーツによる社会化への強い期待（教育熱）を考慮するならば、今日の幼児のスポーツ参加は家庭における性格形成やしつけ機能の「教室」への委譲（ある意味では放棄）を意味し、必ずしも「スポーツへの社会化」を意味するものではないといえることができる。

4. 考 察

今回の調査結果から、今日の幼児のスポーツ教室繁栄の背景には、社会経済的条件と関連しつつ、両親のスポーツ関心の高さと教育熱が相乗的に作用している状況があると考えられる。

子どものスポーツへの社会化に果す両親の影響については多くの研究者の指摘するところであるが、幼児期の初期学習では両親が最も重要な、殊んど一義的な社会化エージェントとして機能している。J. Loy ら⁹⁾が指摘するように、両親が積極的にスポーツを評価したり、現在あるいは過去にスポーツを経験していたり、よくスポーツ行事を観戦・視聴したり、あるいは、子どものスポーツ参加を期待し奨励したり、家庭でスポーツの話題がよく交わされる場合、すなわち両親のスポーツ関心が高い場合、子どものスポーツ関心とスポーツ参加は高くなる。本調査でもこれら先行研究と同様の結果が得られた。しかし、従来のスポーツへの社会化研究では、家族内の重要な他者として、父親^{8) 7) 19)}が報告されてきたが、本調査結果からは参加者母

親のスポーツ実施を含めた関心の高さと、社会化エージェントとしての母親の役割が明らかであった。この相違は、対象が幼児であり、スポーツへの社会化という限定された特殊領域への社会化というより、むしろ一般的な子どもの社会化に対する母親の役割がここでもクローズアップされた結果であろう。従って、社会化エージェントとしての母親のスポーツ関心の高さが、幼児のスポーツ参加に強く影響を与えていると考えられる。

しかし、今日の幼児のスポーツ参加の現象をみる限り、その両親のスポーツ関心の高さは、子どものスポーツ役割の学習、将来のスポーツ参加へと帰結する「スポーツへの社会化」モデルに必ずしも一致しない場合もある。本調査では、両親の教育熱の内容そのものを特定化できなかったが、この事実はスポーツによる社会化に対する両親（特に母親）の強い期待（教育熱）を、幼児のスポーツ参加を規定する一方の変数として想定することが可能であることを示している。スポーツ参加の主体である幼児の意識が希薄である以上、「強化」「コーチング」「モデリング」という社会的学習の側面⁵⁾は、両親から一方的に強く働きかけられる。したがって、両親の期待内容あるいはその効果しだいによって、幼児のスポーツ参加は左右されるものとなるのである。近年、子どものスポーツをめぐる問題の中で、スポーツ教室を一連の学習塾と同列に据えたり^{2) 4)}、「しつけ教育」として捉える論評⁵⁾も多い。しかし、対象を幼児に限定し、両親の期待内容や退会理由をも含めた、スポーツ教室参加のメカニズムを明らかにした研究は殆んどない。本調査もその調査対象・内容に限定された、問題探究的な試論として位置づける必要がある。

スポーツ的社会化は、Kenyon ら⁶⁾のモデル構築から、ここ10年ほどの間にスポーツ社会学の一研究領域となった。このモデルは、社会的学習理論・役割理論・準拠集団理論を援用しながら、「スポーツへの社会化」と「スポーツに

よる社会化」をスポーツ参加によって媒介される連続体の二側面として設定している。これまで、スポーツ社会学では「スポーツによる社会化」は軽視されてきた経緯はあるが、最近、先行研究の成果を踏まえた包括的なレビュー¹¹⁾¹²⁾¹⁵⁾も出現している。しかし、いくつかの点で先行研究の再吟味も必要である。本研究の課題設定および調査結果と関連させるならば、次のような問題提起が可能であろう。

1) 従来の「スポーツへの社会化」研究の多くは、一流競技者や大学生・青少年を対象としたものであった。近年、一般成人や子ども^{3) 18)}にも関心を持つようになったが、幼児を含めた低年齢層や高年齢層を直接この理論から研究したものはほとんどない。スポーツが大衆化し、あらゆるライフステージでのスポーツ参加が叫ばれる時、実践的理論的意味でこれら年齢層の研究も必要である。そして、幼児のスポーツ参加の場合には、従来の「スポーツへの社会化」理論からだけでなく、両親の期待、及び、非参与や脱参与の問題をも含めた理論構築が必要となろう。

2) 「スポーツへの社会化」の研究方法は、その対象との関わりから、Snyder ら¹⁷⁾が述べるように、回想的方法 (retrospective view) あるいは再生法 (recall techniques) が有効なものとして使用されてきた。しかし、Allison¹⁾も指摘するように、例えば大学生や成人が子どもの頃の重要な他者や両親のスポーツ関心を振り返ること自体、不正確な記憶や印象でしかない。同じ年齢層・方法で行った従来の研究に異なる結果が生じる一因にはこの記憶の不確かさがあるといえる。本来このような研究は縦断的・追跡的なものである。研究の性格にもよるが、将来、追跡的な方法を用いた調査研究にも関心に向ける必要があるだろう。

3) 「スポーツへの社会化」理論は、一般モデルとして、個人的属性・重要な他者・社会的状況を影響因子とする単純なモデルである。確かに、McPherson¹¹⁾が詳細に述べているように、それぞれの要素をある程度特定化はできる

が、重要な他者の関心内容そのものにはこれまで注意は払われてこなかった。従来の研究では、重要な他者の影響はスポーツ参加に対する「励まし」(encouragement) として設定され、その「励まし」の内容は看過されてきた。しかし、スポーツ参加に対する励ましは一律なものではない。しかも、山本²¹⁾が、スポーツ指導者の理念と現実とのズレから勝利志向が人間形成論にすり代わることを指摘するように、この「励まし」や期待は顕在化しない「タテマエ」と「ホンネ」を合せ持っている。本研究の場合も含めて、両親や指導者などの社会化エージェントは単なる「励まし」ではなく、そこに「タテマエ」と「ホンネ」の期待を含み、その結果しだいでは子どものスポーツ参加に大きな影響を及ぼすことになるのである。これまで「スポーツへの社会化」の中で十分に扱われてこなかった、「逸脱」の問題や「逆あるいは相互の社会化」¹⁸⁾の解明の一助にも、また、「スポーツへの社会化」と「スポーツによる社会化」のダイナミックな統合のためにも、この社会化エージェントの期待内容は検討される必要があるだろう。

(本稿の要旨は、日本体育学会第34回大会において発表した。)

参 考 文 献

- 1) Allison, Maria, "Sport, culture and socialization", *International Review of Sport Sociology*, 17-4, p.18, 1982.
- 2) 海老原修「子どものスポーツにおける指導者に求められるもの」*体育科教育* 32-8: 39-41, 1984.
- 3) Greendorfer, S. L. and Lewko, J. H., "Role of family members in sport socialization of children", *The Research Quarterly*, 49-2: 146-152, 1978.
- 4) 広畑成志「子どものスポーツ定着・発展のプログラム」*体育科教育* 32-8: 23-25, 1984.
- 5) 犬飼義秀「しつけ教育としての子どものスポーツ」佐伯聰夫編著：現代スポーツの社会学，不昧堂出版，1984，21-34頁。
- 6) Kenyon, G. and McPherson, B. D., "Becoming

- involvement in physical activity and sport: a process of socialization”, In G. L. Rarick (ed), *Physical Activity: Human Growth and Development*, New York, Academic Press. 1973, pp. 304-333.
- 7) 桑野豊, 池田勝, 山口泰雄「バス解析によるスポーツ参加の分析」筑波大学体育紀要 2: 23-30, 1979.
 - 8) Leonard II, W. M., *A Sociological Perspective of Sport*, Burgess P. C., 1980, pp. 84-85.
 - 9) Loy, J. W., McPherson, B. D. and Kenyon, G., *Sport and Social System*, Addison-Wesley P. C. 1978, p. 221.
 - 10) 丸山富雄「幼児のスポーツ参加と両親の影響(第1報)」仙台大学紀要 14: 121-132, 1982.
 - 11) McPherson, B. D., “Socialization into and through sport involvement”, In G. Luschen and G. Sage (eds.), *Handbook of Social Science of Sport*, Stipes P. C. 1981, pp. 246-273,
 - 12) 中島信博「家族とスポーツへの社会化」桑野豊編著: 現代社会とスポーツ, 不昧堂出版, 1984, 40-52頁.
 - 13) 永吉宏英, 塚本真他「幼児・児童のスポーツ参加の社会的背景」体育社会学研究会編: スポーツ参加の社会学, 道和書院, 1977, 101-121頁.
 - 14) 西野泰広他「ラグビー・スクールの入校動機と, 効果意識に関する研究」体育学研究 23-3: 263-274, 1978.
 - 15) 三本松正敏「スポーツ社会学における“社会化”研究の展開と課題」福岡教育大学紀要 31, 第5分冊: 139-149, 1981.
 - 16) Snyder, E. E. and Spreitzer, E., “Family influence and involvement in sport”, *The Reserch Quarterly*, 44-3: 249-255, 1973.
 - 17) Snyder, E. E. and Spreitzer, E., “Sport, education, and schools”, In G. Luschen and G. Sage (eds.), *Handbook of Social Science of Sport*, Stipes P. C. 1981, p. 120.
 - 18) Snyder, E. E. and Purdy, D A., “Socialization into sport: parent and child reverse and reciprocal effects”, *The Reseach Quarterly*, 53-3: 263-266, 1982
 - 19) Spreitzer, E. and Snyder, E. E., “Socialization into sport: an exploratory path analysis”, *The Reseach Quarterly*, 47-2: 238-245, 1976.
 - 20) 上柿和生「スポーツ塾の明と暗」体育科教育27-1: 37-39, 1979.
 - 21) 山本清洋「スポーツによる社会化の可能性と限界」佐伯聡夫編著: 現代スポーツの社会学, 不昧堂出版, 1984, 7-20頁.

Sport Participation of Preschool Children and Parents Influence (2)

—A Comparative Study on Sport-school

Participants and Non-participants—

Tomio MARUYAMA

The purpose of this study was to clarify a mechanism of sport participation of preschool children. Three items composed of parents' social achieved status, parents' interest in sport and parents' educational eagerness were investigated. Data were collected from 271 parents whose children attended kindergarten at Tōkyo (sport-school participants 129, non-participants 142).

As the results, participants' group was higher than non-participants' at all three items. Thus, it seems that sport participation of preschool children is influenced by both parents' interest in sport and parents' educational eagerness, associated with parents' socio-economic background. At the same time, mother's role as a general socializing agent was closed up.

In future, a longitudinal study including the details of parents' interest in their children in sport may be necessary.